

第112回 岡山外科学会

日時：平成2年6月23日（土）13時より

会場：岡山大学図書館鹿田分館3階

会長：井上 一

（平成2年6月25日受稿）

1. 乳児および小児の化膿性股関節炎の治療経験

国立岡山病院整形外科 小西池 泰三 高杉 仁 梶木 美樹

昭和52年よりの13年間に当科において経験した乳児および小児の股関節炎は17例で、そのほとんどが比較的早期に初期治療が行い得たものであった。我々は主に関節穿刺、洗浄にて初期治療を行っているが、この治療成績について検討した。片田の判定基準によって分類すると、不可例はなく優13例、良3例、可1例であった。

発症年齢が1歳未満、気炎菌が黄色ブドウ球菌の症例の予後が不良であった。排膿時期については4日以内に排膿すれば10例中9例が変形なく治癒し、5日以降では骨頭肥大等の骨変形を7例中3例に認めた。排膿法の選択より如何に早く排膿するかが重要であると思われた。

2. 多発骨折や再骨折をきたした Pycnodysostosis の1例

岡山済生会総合病院整形外科 川 澁 靖 人 定 金 卓 爾 永 沢 大
和 気 博 文 守 都 義 明

今回、我々は多発骨折や再骨折をきたした51歳女性の pycnodysostosis の症例を経験した。本症では、骨代謝異常ともなう易骨折性があり、両大腿骨転子下骨折は、右側保存的治療治療後5年、左側は観血整復し抜釘後5年で再骨

折した。両側とも横止めを加えた髓内釘固定で現在歩行可能となっている。抜釘後の再骨折などの経験から、本症で年齢の高い例では、特に下肢の骨折では抜釘をしないで経過をみるのが好ましいと考えられた。

3. 岡山県内における脊髄損傷発生について

真星病院整形外科 戸田 敬一郎

1989年度岡山県内発症の脊髄損傷について主要医療機関にアンケート調査した結果157症例あり男女比は5対1であった。人口1万人に対し0.81人発症しており加齢とともに増加していた。麻痺の高位は頸椎132症例、胸髄以下25症例であ

った。外傷の種類では転落、交通事故が各々1/3を占めていた。年齢別に種類をみると若年者は交通事故、高齢者は転倒が多い。今後、治療方法、治療期間、予後についても検討を要すると思われる。

4. HAM (HTLV-I-associated myelopathy) の2例

岡山市立市民病院整形外科 高取 和弘 渡辺 唯志 林 充
吉村 一穂
大洲中央病院整形外科 河合 岳雄

HAM (HTLV-I-associated myelopathy) は、成人T細胞白血病(ATL)を起こす human T cell lymphotropic virus type I (HTLV-I) によって起こされる慢性脊髄麻痺である。

今回我々は、HAM 患者の2例を経験したの

で報告する。緩徐進行性の錐体路症状を呈する myelopathy に対しては、常に HAM の存在を念頭におき抗 HTLV-I 抗体などの検索が必要である。

5. 肩鎖関節脱臼を伴った烏口突起骨折の1例

倉敷第一病院整形外科 長谷川 康裕 四宮 純二 佐藤 和道

症例は22歳、男性。バイク走行中転倒、右肩を打撲した。右肩鎖関節部に階段状変形と圧痛、右烏口突起部に圧痛と異常可動性があり、レ線上、右肩鎖関節脱臼を伴った右烏口突起骨折を認めた。烏口突起の解剖学的整復を試みたが、

整復、固定が困難なため、Dewar 法を応用し、烏口突起骨片を鎖骨へ移行、螺子固定した。術後3ヵ月にて疼痛なく、右肩関節は内旋、外旋に軽度の制限を認めるも、屈曲、外転は正常で、現職に復帰している。

6. 脊髄硬膜外膿瘍の1例

香川県立中央病院整形外科 石橋 直大 西原 伸治 戸田 敬一郎
衣笠 清人 長野 健治

症例は、71歳の糖尿病を既往歴に持つ女性で、一週間の持続硬膜外ブロックを受け、チューブ抜去の翌日から腰痛の増悪と発熱をきたし、さらに両下肢不全麻痺へと進み、当科紹介となった。脊髄症状が出現して6日目に椎弓切除術を

行ない化学療法を併用し、術後6週で特に神経学的異常を認めず、一本杖歩行にて退院された。感染範囲は、第9胸椎～第5腰椎で、Heusner 分類でIII期、Grant 分類の亜急性型に相当した。

7. 70歳以上の腰椎手術時の問題と術後成績

岡山赤十字病院整形外科 生田 陽彦 三宅 完二 小野 勝之
那須 正義 池田 隆浩 名越 充
宮本 宣義

近年高齢者の Quality of life の向上が話題にされ、高齢であっても腰椎手術の適応となる症例は明らかに増加しており、高齢者であるがために術前、術後管理が問題となっている。今回我々は、70歳以上で過去3年間に腰椎手術を行

なった15症例について検討した。術後、急性心筋梗塞を起した症例とストレス潰瘍を起した症例を除いて、術後の経過は良好で好成績が得られている。

8. 大腿骨顆上骨折に対する螺子横止め付髄内釘固定の治療経験

岡山労災病院整形外科 相谷 哲朗 安田 金蔵 小浦 宏
鶴上 浩 田辺 剛造

大腿骨顆上骨折に対し螺子横止め付き髄内釘固定を6症例に行ってきた。骨折型は1例を除き5例とも粉碎化の強い骨折であり、顆部と顆上部の粉碎化したものは3例あり、他の2例は顆上粉碎型であった。髄内釘の利点は、末梢骨

片の整復が簡単で、かつ確実にできること、骨折部に嵌入が起き骨自体による安定性が得られる。骨癒合が促進される等の利点がある。末梢骨片を螺子で横止めすることによりCPMによる早期運動が可能になる。

9. 頸部血管性病変の手術における MR angiography

岡山大学脳神経外科 伊藤 隆彦 片山 伸二 槌田 昌平
浅利 正二 西本 詮
旭東病院脳神経外科 吉岡 純二 土井 章弘
横河メディカルシステム 池崎 吉和 吉留 英二

0.5T MRI装置を用い、27例について頸部の血管の描出を行なった。頸動脈は健常者、狭窄性病変およびその術後検査において、鮮明に描出され、血管性病変の同定および術後評価に有用な結果を得た。椎骨動脈については現段階で

は血管形態の把握は困難であった。

MRAは非侵襲的検査であり、ほとんどの症例で検査が可能であるため、頸部内頸動脈閉塞性病変のスクリーニングおよび術後検査として有用であると考え報告した。

10. トルコ鞍の著明な拡大を示した Rathke's cleft cyst の1例

岡山労災病院脳神経外科 坂井 恭治 諸岡 弘 難波 真平
岡山大学脳神経外科 篠山 英道 新見 仁寿

症例：52歳、女性。昭和42年頃より両耳側上四半盲が出現し、徐々に進行する。視力は左で低下し、視神経萎縮を認める。頭蓋単純写でトルコ鞍の著明な拡大を認め、MRIでは拡大したトルコ鞍内から鞍上部にかけて腫瘤が dumbbe

II型に存在し、T₁強調で低信号、T₂強調で高信号であり、脳脊髄液に類似した信号を示した。経蝶形骨洞法による嚢胞開放術を行ない、術後視野視力障害は改善し、病理組織診断はRathke's cleft cystであった。

11. 輸血によるアナフィラキシー様反応の診断に経気管的心拍出量モニターが有用であった2症例

岡山大学麻酔科蘇生科 中山 泰典 桜井 康子 広田 真美
佐伯 晋成 難波 健利 小林 尚日出
小坂 二度見

麻酔中に発生した輸血によるアナフィラキシー様反応の血行動態は、末梢血管抵抗の低下と心拍出量の増加を基本としている。今回、経気

管的心拍出量持続モニターが、輸血によるアナフィラキシー様反応の早期診断に有用と考えられたので報告した。

12. MRangiographyを施行した脳死症例 2例

岡山大学麻酔科蘇生科	森本直樹	下田豊	小坂二度見
岡山大学脳神経外科	伊藤隆彦	浅利正二	西本詮
岡山旭東病院脳神経外科	田中朗雄	吉岡純二	土井章弘

MRangiography は、非侵襲性かつ造影剤を用いずに生体内血流を捉えることが出来る。MRangiography を利用して non-filling phenomenon を証明した脳死 2 症例を報告した。

5 cm/sec で撮影した MRangiography で、

1 例は内頸動脈の起始部で、もう 1 例は内頸動脈終末部で血流の消失がみられた。さらにわずかの血流でも描出されやすい静脈洞も描出されなかった。MRangiography は脳死の補助診断に有用である。

13. 肝吸虫症の 1 手術例

岡山協立病院外科	幡文子	川西瑞哉	浪尾博志
----------	-----	------	------

近年のわが国では稀となった肝吸虫症の、国内感染と思われる症例を報告する。

患者は64歳の女性で、上腹部痛を主訴に受診した。胆石、胆管炎及び急性膵炎と診断し開腹

したところ、総胆管切開により六体の肝吸虫成虫が発見された。術後はプラジカンテルにより駆虫を行い、術後61日目にTチューブを抜去し、軽快退院した。

14. 総胆管隔壁形成の 1 例

津山中央病院外科	貞森裕	波多野浩明	日下泰徳
	中島明	長江聡一	黒瀬通弘
	徳田直彦		

症例は52歳女性。食後の心窩部痛を訴え、ERCPにて総胆管中部から下部にかけて存在する数条の横走る隔壁形成とその肝門側に1個の総胆管結石を認めた。胆摘後総胆管切開にてビス石を摘出し、術中胆道造影・胆道ファイバ

ーでも ERCP と同様の所見を認めたが、総胆管の通過性良好であるため隔壁切除は施行しなかった。隔壁の生検像で腫瘍性変化のない胆管上皮を認めた。総胆管隔壁形成は稀で、若干の文献的考察を加え報告した。

15. 胆嚢捻転症の 2 例

国立岡山病院外科	白井由行	平井隆二	大西敏行
	岸淳彦	松原淳	宇野浩司
	田中信一郎	野村修一	東良平
	佐々木澄治		

最近、80歳、76歳いずれも女性2例の本症を経験し、1例は術前診断がなされた。今回の症例では1例は胆石があり、急性胆嚢炎と誤診したが、他の1例は胆石もなく、CTにより胆嚢の位置異常、胆嚢壁の特徴的な肥厚と阻血を考

え、胆嚢捻転症と診断した。本症は稀な疾患であるが、やせ型、亀背、高齢女性で急性胆嚢炎様の症状があれば、急性腹症を呈する疾患の1つとして本症を念頭に置くことが重要であると思われる。

16. 胆道拡張症の2手術例

川崎医大消化器外科 小牧隆夫 木元正利 清水裕英
 牟礼勉 岩本末治 延藤浩
 忠岡好之 吉田和弘 山本康久
 佐野開三

胆道拡張症の2手術例を報告した。本症の初期診断には超音波検査が有用であった。術前・術中造影検査で膵管胆道合流異常を確認しておく事は、嚢胞切除の際、胆管末端部の追求や膵管損傷を避ける上でも重要である。膵内剝離面

からの出血に対しては順次巾着縫合を施す事により止血する事ができた。手術は肝外胆管拡張部切除後、再建術式として一例に Roux-en-Y 肝管空腸吻合術を、他の一例に空腸間置肝管十二指腸吻合術を行った。

17. 縦隔腫瘍における MRI 診断の検討

光生病院外科 為季清和 喜岡幸央 佐能量雄
 光生病院放射線科 中川富夫
 岡山大学第二外科 清水信義

縦隔腫瘍25例について胸部 MRI を施行し、T₁強調像と T₂強調像での信号強度から腫瘍の性状の鑑別における MRI の臨床的有用性について検討した。充実性腫瘍と嚢胞性腫瘍との鑑別に T₂強調画像は極めて有用であった。腫瘍

の良性悪性の鑑別において信号強度は非特異的であり、鑑別困難と思われた。血管性病変との鑑別は容易であり、動脈瘤と腫瘍性病変との鑑別に有用であった。

18. 簡易式一時バイパス法による大道脈合併肺癌切除の1治験例

岡山大学第一外科 山本修 井上文之 猶本良夫
 上川康明 阪上賢一 折田薫三
 心臓病センター榊原病院心臓血管外科 畑隆登 難波宏文 杭ノ瀬昌彦
 谷口堯

症例は59歳男性、主訴は左胸部痛、近医で胸部レ線にて異常陰影を指摘され、精査の結果大動脈浸潤を伴う T₄N₂M₀ stage IIIb の進行肺癌であった。従来 T₄ の肺癌、すなわち stage III b 以上の症例に関して手術適応なしとされてき

たが、今回我々は、簡易式一時バイパスを用いて、左肺全摘及び浸潤大動脈合併切除術を施行した。簡易式一時バイパスにより、進行肺癌に対してより拡大した手術を行うことができ、今後外科的治療の重要性が期待される。

19. 肋骨原発の線維性骨異形成の1例

国立岡山病院呼吸器外科 松原淳 東良平 宇野浩司
 佐々木澄治

今回我々は、肋骨原発の線維性骨異形成の一例を経験したので報告する。症例は37歳、男性で主訴は、右側胸部腫瘍。最大径23.5cm、ひょうたん型の腫瘍で、軽度の圧痛と多少の増大傾

向を伴っていた。術前画像診断より第9肋骨原発の良性骨腫瘍の疑いのもと、第9・10肋骨合併腫瘍摘除術を行った。胸壁欠損部は Marlex Mesh にて補強を行った。腫瘍は第9肋骨より

発生した病理組織学的には、線維性骨異形成の像を呈していた。

20. 開心術後ドレーン出血再輸血の試み

国立岡山病院心臓血管外科 藤田 邦雄 谷崎 眞行 森田 照正
大西 敏行

ディスプレイザブル低圧持続吸引器一体型ドレーン血回収再輸血装置を用い、ドレーン血および患者血についてCBC, GOT, LDH, CK, TP, Na, K, CL, 遊離 Hb を測定し、ドレーンの

出血速度と回収量を調べた。

RBC, Hbは出血速度と正の相関があり, GOT, LDH, CK は患者血と正の相関があった。

21. 小児肺分画症の1手術例

岡山赤十字病院外科 宇高 徹 総 大守 規 敬 今井 茂 郎
辻 尚 志 古谷 四 郎 川上 俊 爾
小野 監 作 大塚 康 吉 佐藤 泰 雄

我々は、小児肺分画症の1手術例を経験したので、若干の文献の考察を加えて報告する。

症例は8歳男児。主訴は発熱。胸部X線, CTで、肺分画症を疑い、血管造影で確診、手術を

施行、肺葉内肺分画症と診断した。小児の胸部X線で、嚢胞様腫瘤陰影を見たら、一度は、肺分画症を疑い、その方面の検索をする事が必要であると思われた。

22. 骨折・脱臼を伴った血管損傷

岡山労災病院外科 間野 正之 西 英行 原田 英樹
古本 雅彦
岡山労災病院整形外科 安田 金蔵

10年間に経験した骨折・脱臼を伴った血管損傷は男19, 女2で、年齢は16-75歳である。同時動静脈損傷は7, 動脈のみ損傷は11, 二次的に動脈瘤形成2, 動静脈瘻形成1である。術式は動静脈吻合12, 静脈置換4, 人工血管置換1,

血栓除去1, 動脈瘤切除1, 瘤切除と静脈置換1, 動静脈瘻切離1である。血行再建後の四肢再切断は4である。本損傷では絶えず血管損傷を念頭におき、早期診断と早期治療が必要である。

23. Carotid body tumor の2手術例

川崎医科大学胸部心臓血管外科 福広 吉晃 藤原 巍 土光 荘六
稲田 洋 正木 久男 三宅 隆
勝村 達喜

今回我々は頸動脈小体腫瘍の2手術例を経験したので報告する。一例は総頸動脈単純遮断で、

他の一例は外頸動脈一時遮断で手術を施行した。

24. 両側浅大腿仮性動脈瘤の1治験例

淳風会倉敷第一病院外科 向田 尊洋 近藤 潤二 池田 光則
原 史人 中嶋 健博

我々は胸部大動脈瘤を伴う両側浅大腿仮性動脈瘤の1例を経験した。末梢動脈瘤は早急な外科治療が必要だが、本例は炎症性と思われ炎症の鎮静化後に手術を施行した。本例は瘤を空置

し bypass 術を行ったが、原則的に瘤切除・主幹動脈再建が望ましく、個々の症例に合った手術方法の検討を要すると思われる。

25. 左心室前乳頭筋 papillary fibroelastoma に緊急僧帽弁人工弁置換術を施行した1症例

心臓病センター榊原病院心臓血管外科 難波 宏文 畑 隆登 曾根 良幸
瀬尾 和宏 今牧 瑞浦 杭ノ瀬 昌彦
村上 貴志 谷口 堯

左心室前乳頭筋 papillary fibroelastoma に対して緊急的に左心室内腫瘍摘出術及び僧帽弁人工弁置換術を施行した1症例を経験した。そ

の診断上、超音波心断層図は極めて有用であった。術前術中所見を中心に報告する。

26. 右胃大網動脈を用いた冠動脈バイパス術

岡山大学第二外科 柚木 継二

右胃大網動脈を冠動脈バイパス術に5例用いたので報告する。①5例のうち1例を失ったが、4例は良好な結果を得ている。②右胃大網動脈は、内胸動脈に比べ内径が小さく、流量も少な

いので、径の細い冠動脈に有用である。③右胃大網動脈の発達が悪い例もあり、適応を慎重にする。④上腹部手術時に危険因子となりうる。

27. 画像上、胆管細胞癌を強く疑った胃癌転移例の1例

倉敷松田病院外科 平本 孔彦 松田 忠和 石塚 真示
船曳 定実 岩藤 隆昭 松田 和雄

今回われわれは、画像上最も胆管細胞癌を疑わせたが、病理組織学的に胃癌（中分化型管状腺癌）の肝転移（5×5×5cm）と判明した1例を経験した。また、胃癌も内視鏡的に早期胃

癌であったため、Metastasis とは考えにくく早期胃癌と云えども肝転移に留意すべきだと思われた。

28. 大腸憩室穿孔の2例

倉敷中央病院外科 川口 義弥 高三 秀成

近年、大腸憩室症は増加傾向にあり、穿孔、出血、結腸周囲膿瘍瘻孔形成などの合併症をおこした場合は外科的治療が必要となる。今回我々は横行結腸、S状結腸憩室炎が腸間膜側に大き

な膿瘍を形成し、穿孔を来した症例を経験したので報告する。症例1では十分な洗浄の上、一期的に横行結腸切除、吻合を行なった。症例2では既にDIC状態であった為、S状結腸切除、

ハルトマン術式を施行し、それぞれ経過良好である。

29. 当院における大腸肛門部悪性疾患診断の動機

チクバ外科・胃腸科・肛門科病院 中谷 紳 瀧上 隆夫 竹馬 浩

1985年1月より1990年1月までの最近5年間に当院で診断された大腸肛門部悪性疾患241例の診断の動機について検討した。進行癌173例, 早期癌60例, 男性145人, 女性96人で平均年齢60.8歳だった。主訴は肛門出血等肛門症状が多かった。診断の動機として肛門指診96例40% (腫瘤を触知したもの63例, 示指に血液の付着したもの33

例), 内視鏡129例53% (直腸鏡14例, Sigmoidscopy 34例, total Colonoscopy 81例)であった。大腸肛門部悪性疾患の診断に際しては1. 問診・直腸指診を軽視してはならない。2. 大腸内視鏡検査を積極的におこなうべきであると考えられる。

30. 後腹膜腔に発達した虫垂粘液囊腫の1例

岡山大学第二外科 森本 徹 小松原 正吉 寺本 滋

症例は60歳男性, 近医で右下腹部腫瘤を指摘され精査加療目的で当科入院となった。CT, エコーにて石灰化を有する嚢胞性病変を認め, 後腹膜囊腫として手術を施行したところ, 後腹膜腔に発達した虫垂粘液囊腫であった。病理診断

は mucinous cystadenoma が得られた。虫垂原発の粘液囊腫は通常腹膜腔内に存在するもので, 後腹膜腔に発達した例は極めて珍しく, 我々の症例は本邦第5例目と考えられる。

31. 教室における家族性大腸ポリポース症例の検討

岡山大学第一外科 渡辺 和彦 岩垣 博巳
ルイス・フェルナンド・モレイラ 淵本 定儀
折田 薫 三

1966年から1990年までの過去25年間に教室が経験した家族性大腸ポリポースは9家系13症例で平均年齢は33.5歳, 男女比は1.2:1であっ

た。胃・十二指腸ポリープ合併率, 癌化率はともに13例中8例61.55%であった。

32. 多発胃癌に合併した SMT の1症例

岡山済生会総合病院外科 枝 廣 徹 広瀬 周平 北村 元男
筒井 信正 大原 利憲 木村 秀幸
三村 哲重 戸田 耕太郎 鷺原 規喜
村岡 篤 木村 臣一 守本 芳典
佐々木 潔 片岡 和男

上腹部痛で来院した患者に胃 X-P で胃体上部小弯に隆起性病変を, 胃内視鏡で同部に粘膜下腫瘤を胃角部にII。進行型の胃癌を認め手術を行なった。粘膜下腫瘤は組織学的には径1.5cmの submucosal cyst で多房性であった。胃癌は胃

角部の他, 前庭部小弯に ATP を伴った微少なものが重複していた。胃粘膜下腫瘤は平滑筋腫, 平滑筋肉腫が頻度的に多く, 大きな cyst は珍しいとされている。

33. 胃全摘術後第2病日に偽膜性大腸炎による hypovolemic shock をきたした1症例

岡山大学第一外科 松川啓義 猶本良夫 仁熊健文
合地明 上川康明 淵本定儀
阪上賢一 折田薫三

胃全摘術後早期に偽膜性大腸炎が発症し、体液の消化管壁・消化管内の移行により重篤な hypovolemic shock をきたした一例を経験した。消化管手術後早期に本症が発症した場合、蠕動

の遅延のため下痢が出現するまでに時間を要し、診断に難渋する場合が多い。この際除外診断を行いつつ大腸ファイバーを施行することが本症の診断に有用であると考えられる。

34. 大量出血に対し、二期分割手術によって救命し得た食道癌の1例

岡山大学第一外科 玉木孝彦 日伝晶夫 上川康明
阪上賢一 折田薫三

大量吐血を主訴として発症し、緊急手術を必要とした食道癌の1例を経験したので報告した。本症例は、臍頭十二指腸切除術々後であったため、遊離空腸および有茎結腸を用いて再建術を

行った。また、大量出血、アルコール性肝硬変、糖尿病を合併しており、プア・リスクであったが、二期分割手術を施行することにより、救命し得た。

35. AFP 高値を示した早期胃癌の1例

岡山労災病院外科 西英行 間野正之 原田英樹
石原弘道 津田昭次 古本雅彦

今回われわれは術前血清 AFP が高値を示し、肝転移を有さない早期胃癌を経験した。症例は81歳、女性で、胃前庭部に II_a+II_c 型早期胃癌。

術前 AFP 値は、678.2ng/ml と高値を示した。術後約1ヵ月で正常化し、術後1年8ヵ月、再発の兆候なく経過している。

36. イレウス管抜去後に発生した小腸腸重積の1例

岡山赤十字病院外科 大守規敬 宇高徹総 今井茂郎
辻尚志 古谷四郎 川上俊爾
小野監作 大塚康吉 佐藤泰雄

イレウス管の抜去後に腸重積を生じた症例を経験したので報告する。症例は、63歳の男性、胃癌再発による結腸閉塞のためイレウス管挿入、バイパス術の後イレウス管を抜去したが、翌日より、腸閉塞の状態となり、手術を行ったところ

ろ空腸空腸型の腸重積であった。

今回の腸重積は、イレウス管抜去後、蛇腹状となった小腸が先進部となったものと考えられ、イレウス管使用の際には、腫重積の合併に注意する必要があると考えられた。

37. 大腿部膿瘍で発症した閉鎖孔ヘルニアの1例

川崎医大附属川崎病院外科 吉田 一典 溝上 宏明 安田 俊子
 月山 雅行 山下 昭彦 木曾 光則
 光野 正人 松井 俊行 小山 昱甫
 川崎 祐徳 吉岡 一由

83歳女性。主訴は右鼠径部痛，右大腿部腫脹。右大腿部X線写真でガス像を認め膿瘍の診断で右大腿部内転筋切除。その際，右閉鎖孔ヘルニアあり，ヘルニア嚢を通して壊死腸管が透見され，閉鎖孔ヘルニア嵌頓と診断し開腹，右閉鎖

孔に回腸末端より50cmの部の回腸が Richter 型に嵌頓し穿孔を認めた。部分切除後閉鎖孔を閉鎖した。術後82日目に軽快退院した。閉鎖孔ヘルニアは大腿部膿瘍として発症することもあり注意を要する。

38. 壁外性に発育を示した食道粘膜下腫瘍の1例

おもと病院 岩本 伸二 石賀 信史 庄 達夫
 石原 清宏 酒井 邦彦 岩藤 真治
 山本 泰久
 高松通信病院 藤井 康宏

症例は28歳男性，主訴は心窩部痛，嚥下困難。食道造影，内視鏡，CTにて壁外性に発育した粘膜下腫瘍と診断し，左開胸，開腹にて腫瘍摘

出術を施行した。病理組織検査では平滑筋腫と診断された。腫瘍9.5×6.0cmの馬蹄形を呈していた。術後，特に合併症なく経過した。